

青年期におけるセルフ・モニタリングと対他的同一性の関連  
—本来感と対人関係に対する否定的意識に着目して—

立命館大学大学院  
応用人間科学研究科  
臨床心理学領域  
伊藤 ゆきの

本研究の目的は、青年期におけるセルフ・モニタリング（状況によって自己呈示を変容させる能力）と対他的同一性（他者から理解されている感覚）との関連について検討し、(1) セルフ・モニタリングが高い者の本来感と、自らの対人関係に対する否定的意識について明らかにすること (2) 対他的同一性が青年期の適応にどのように関わっているのか明らかにすることの 2 点であった。大学生 212 名を対象にセルフ・モニタリング、対他的同一性、本来感、対人関係に対する否定的意識、自尊感情、一般的感情について質問紙法による調査を行った。分散分析の結果、セルフ・モニタリングが高く対他的同一性が低い群は、他の群に比べ本来感が低く対人関係に対する否定的意識が高いことが明らかとなった。また、セルフ・モニタリングが高い群でも、対他的同一性が高ければ本来感が高く、対人関係に対する否定的意識は低いことが示された。セルフ・モニタリングの高さに関わらず、対他的同一性が高い群の方が、本来感や自尊感情が高く、否定的感情が低いことが示された。以上の結果から、セルフ・モニタリングが高い者の本来感や対人関係に対する否定的意識は、対他的同一性の高さにより大きく変わることが示された。また、対他的同一性が高いほど、本来感や自尊感情が高く、対人関係に対する否定的意識や否定的感情は低いなど、対他的同一性が青年期の適応に重要な要素であることが示唆された。